

蘇州の華は、やはり園林であろう。「江南園林天下の甲、蘇州園林江南の甲」といわれるほどである。古くは五代十国(907年～960年)のころから明、清まで長い間に数々の名園が地元の大商人や官僚によって競い合うように造られていった。現在は数十か所と言われているが、明清時代には200を超えるほどあったという。

私の手元に中国で買った、「蘇州園林写真集」(2002年出版)がある。この本は、日本人の吉川功という建築家であり、日本庭園などを長年研究された方が出版されたものである。この方は特に蘇州の園林に魅せられて長年現地に赴き、研究されてきた。その本の序に蘇州園林の魅力が書かれているのでその一部を紹介したい。

——〈園林の母体は当然自然美にあるが、その自然を写すだけでは決して高度のものには発展しない。蘇州の文化人達は、城内外に営んだ邸宅の中に、自分の理想の自然を構築した。それは、人の心を通して練り上げられた崇高な芸術作品であり、美の別世界ともなった。特に、園林建築と池水、築山、花木等をいかに調和させるかという点において、蘇州園林は一段と傑出している。自然美をも超越した人の理想の世界、蘇州園林がここに創造されたのであって、それは無声の詩、立体的な絵画ともいえるものであった。私は、この園林美を何とか写真で表現しようと長年努力してきたが、それは思っていたよりも困難な作業であった。深く各園林の隅隅まで知ることが重要であったし、私の専門である日本庭園とは、また別の捉え方が必要であったからである。しかし最近になってようやく私なりに園林美を捉えることができるようになってきたと思う。特に蘇州園林独特の光の変化などに、たまらない魅力を感じるようになった。〉

蘇州園林は、私はどの庭園も確かに美しく素晴らしいと思うものの、前々号(197号)に書いたように太湖石と四阿などを配した庭園はどうも落ち

着かないと書いた。太湖石はどう見てもセメントで造った人造石のように感じられ、とても太湖から引き揚げてきた石とは見えないのである。この太湖石について、司馬遼太郎は「中国・江南のみち」の中で次のように書いている。

——〈長江デルタ地方には、遊水湖として、太湖がある。太湖の底から、奇怪な形をした太湖石が出る。おそらく宋末か明代からであろうか、それを庭園につかうことが流行した。権力のある者、富める者は、あらそってそれを庭園に配置した。怪奇の形相が人をおどろかす石ほど珍重され、それを庭に置くことが権力と富の象徴のようにもなった。最初はおそらく一つか二つ置いてその奇をたのしんだにちがいないが、しまいには庭園じゅうにその白い化物のような石を林立させ、いわば美学以外の情熱を充足させるようになった。〉

私には、これが率直な印象と思える。また各園内の建物のほとんどの屋根は先が反り返っていて、龍が飛び跳ねている印象である。やはり私は日本人だからか、日本の寺院のおだやかな傾斜の屋根と自然石や池水、それに水面に手を差し伸べるような松の姿を見ると心が落ち着いてくる。庭の文化も中国からの影響を受けたはずであるが(司馬遼太郎は日本式の石庭[枯山水]は太湖石をあしらった庭園の影響ではないか、と書いている)、なぜ両国の庭園はかくも違ったものになったのであろうか。ちなみに太湖石の取れる太湖であるが、中国で4番目に大きい淡水湖である。約2400km²あり、琵琶湖の約3倍もある(1番大きいのは青海湖)。この湖は旧暦の9月13日には太陽と月が同じ大きさで太湖に並ぶ「日月同観」という奇観が見られるそうである。私は太陽が西に沈んだ時、満月が東の空から昇りはじめると思っていたのだが……。錢塘江の逆流現象といい、これといい、広い国土にはいろいろな自然現象が起きるものだ。どのような現象なのか見てみたい。横道にそれだが太湖石は太湖のどのあたり

でどのように形成され、そしてクレーンのない時代
どのようにして取ったのであろうか。

今号は有名な園林毎に風景の特徴や美しさを書
こうかとも思ったが、浅学菲才の私にはどの庭園も
同じような造りに見えて筆が進まない。園林の美し
さの紹介は、前述の吉川氏の序文を参考にしてい
たきたい。太湖石については、吉川氏の見解はこの
写真集にはないが氏の見方を聞いてみたいものだ。

四大名園とは、「拙政園」「留園」「獅子林」「滄浪
亭」であるが、それに「網師園」「環秀山荘」「芸圃(げ
いほ)」「藕園(ぐうえん)」「退思園」を加えた九つの
庭園が、1997年に世界遺産に登録された。では
一つずつ紹介しよう。

✿ 留園

清代の庭園様式を今に伝える名園といわれ、規
模は比較的小さいが蘇州四大名園であり、中国四
大名園でもある。中国四大名園とは、「頤和園(北
京市)」「避暑山荘(承德市)」「拙政園(蘇州市)」そ
して留園である。だれがどのような判断で四大名
園と決めたのか知らないが、いずれも世界遺産に
登録されている。この中で私は留園だけはまだ訪
れたことがないが、他の三つの名園に伍して選ば
れているのは立派である。

留園は、16世紀の明代に役人の徐時泰が造園し
「東園」としたのが始まりである。その後18世紀末
の清代に劉恕という人が荒れ果てていた東園を整
備・拡張し「寒碧山荘」と改称した。劉恕が復元し
たので一般に「劉園」と呼ばれた。さらに19世紀清
の光緒年間に、湖北省の布政使であった盛康が大改築
し名称も劉園と同音の「留園」と三度目の改称を行
った。しかしその後またもや日中戦争の影響で軍隊
が馬を養う場所にまで成り果てたが、中華人民共和
国成立後に蘇州市政府が引き継いで現在の姿にし
た。何度も荒廃の憂き目に遭いながらも、不死鳥の
如く蘇ったわけである。度重なる拡張や大改築で最
初の東園の名残りは留めているのであろうか。東園
時代の庭の姿を見たい気がする。

✿ 拙政園

何と言っても蘇州一の園林であり、前述のよう
に中国屈指の名園でもある。造園は16世紀初頭の



小飛虹〈拙政園〉

明代。中央(北京)の高官であった王献臣が失脚後、
蘇州に戻り大宏寺に造った庭園である。拙政の名称は、
西晋時代を代表する文人である潘岳(247年～300年)
が詠んだ「閑居賦」の一節、「拙者之為政〜」(「愚か
者が政治を行っている」の意)から取っている。拙政
とは「まずいまつりごと」の意味で庭園の名前につけ
るような言葉ではないが、おそらく中央政界を失脚し
た怒りをぶつけたように私には思われる。

なお拙政園の写真について簡単に紹介したい。こ
の屋根つきの橋の名前は、「小飛虹」という。拙政園
を紹介するガイドブックにはしばしばこの写真が掲
載される。この橋は「香洲」という画舫(屋形船)に
似せた建物のそばにある。香洲は仙人たちが住む
島に旅立つ船をイメージしている。小飛虹から前方
の池を見ると、漕ぎ出す大海原を想像させるのだと
か。作庭にあたっては神仙蓬莱思想が背景にあるら
しい。

✿ 獅子林

造園は、元代1342年である。名前の由来はこの
園林にある太湖石がライオンに似ているからとい
う。園内に「九獅峰」と呼ばれる太湖石があるが、こ
の石から獅子林と命名したのかどうかは分からな
い。この九獅峰は九頭の獅子がいるように見えるこ
とからその名が付いたとのこと。私にはどうみれば
九頭になるのか、どうもこじつけのような気がして
いる。これで思い出すのは、大連の老虎灘にある8
頭のトラの大きな石像である。こちらははっきりと
8頭を数えられる。

園内はよくこれだけ集めたものだと感心するくらい太湖石があって迷子になりそうである。そしてあちらこちらにライオンが立ち上がったように見える石がある。またこの庭園にも石舫という神仙蓬莱思想を具現した屋形船のような建物がある。中国の長い歴史を感じさせる瞬間である。頤和園にもあったような気がするが、日本にはこのようなものは見たことがない。

この庭園には、「真趣亭」という建物がある。前に



観瀑亭(獅子林)



どこを見ても太湖石だらけの獅子林



滄浪閣。運河と外堀に沿った回廊

(web「アジア写真帳」から転載)

池がありこの建物から康熙帝・乾隆帝が庭を鑑賞されたという。両皇帝は他の園林も見られたであろうが、このような建物はここだけのようである。「真趣」と乾隆帝が書かれた大きな額が思い起される。

ネットを見ていると、獅子林は日中戦争時代、日本軍の軍営として使用され抗日中国人が処刑された場所でもあると聞く、とあった。この庭園は2度行ったが中国人の友人やガイドはそのようなことは教えてくれなかった。事実なら心に刻んでおくべきことである。

✿ 滄浪亭

五代十国の呉越の広陵王の銭元僚が956年に造営した、蘇州の園林ではもっとも古いものである。滄浪亭の滄浪を辞書で引くと、①あおあおとした浪、②湖北省を流れる漢水の下流域の古称、と二つの意味が記載されているが広陵王はなぜこの名称にしたのであろうか。私は「滄浪」と聞くと、連想するものがある。それは神奈川県の大磯にある初代総理大臣・伊藤博文の別荘の「滄浪閣」である。この建物の名前の出典は、楚辞^{注1)}の中にある屈原^{注2)}の「漁夫」からである。その中の「滄浪之水清兮、可以濯吾纓(冠のひも)、滄浪之水濁兮、可以濯吾足」から採ったものだ。屈原といえば同じく楚辞の中の、憂国の情を以って王を諫める賦「離騷」を思い浮かべるが、それと共にこの漁夫は知られているのではないか。漁夫については紙幅の関係で次号で紹介したい。

(つづく)

■ 注記

1) 楚辞: 戦国時代(BC475年～BC221年)の楚の地方で詠われた詩の様式。1から17まであり、「離騷」(三百七十五句から成る中国最長の抒情的叙事詩)は1番目、「漁夫」は7番目である。

2) 屈原:(BC343年頃～BC277年頃) 戦国時代末期の楚の政治家、詩人。楚の王族として今の湖北省・屈坪で生まれた。清廉な人柄であったと言う。楚の懐王の信任は厚く、三閭大夫として活躍したが、中傷に遭って遠ざけられた。その後、懐王の後を継いだ頃襄王の時、またもや讒言に遭いついに遠く江南の地に流された。真っ直ぐに正義を貫こうとした彼は、絶望のあまり「汨羅(べきら)の淵」に身を投じた。